

うたが生まれるとき

講師：工藤 直子



こんにちは、工藤直子です。

今日はほんとにくつろいで聞いてください。私は書いた詩を曲にさせていただいたり、絵にしてもらっています。言葉っていうものが、メロディに乗ったり、自分が朗読して楽しんでみたり、絵や書にしてくれたり、素材として私の詩を楽しんでもらえるととっても楽しいなと思っています。

多分ものを書かれる方は、大切にしたいと思うところは、お一人お一人ちがうと思います。例えばみごとな詩を書いてその形を大事にして一字一句大事にしてそれを朗読するというのもすばらしい形です。私自身は実はそれを壊してしまって自分で遊んだらどう、の部類なんです。

まど・みちおさんは「あなたが朗読したいように読みたいように読んでほしい、そのとき詩は喜ぶ。詩が喜ぶようなやりかたをするときと詩もうれいでしょう。」という言い方をされております。

工藤直子もよく聞かれます。私があるときに申し上げているのは、まず自分自身が好きなものを読んでほしいなあとということです。それも、主婦として、とか母として、とか教育者として、とか読み聞かせグループの一人として、とかの自分の肩書きをはずして、ま

ず一番目に自分はちびちゃんだったら、小学校一年生だったらあるいはいろいろ思い悩んだあの中学生時代だったらどれが好きかな、ということで好きなものを見つけてほしい。見つかったらこっちのものですよね。

「おぎゃっ」て生まれてから本日ただ今まで1秒1秒いろんなものに出会い続けて来て、その春夏秋冬の何億秒というものすごい出会い、時間と言うよりも出会ってきたバームクーヘンみたいなものが自分を作っている。それって誰一人同じ訳ではないから同じ詩を好きになったって絶対に違うんですよ。

試しになぜかわかんないけど私が一番好きなものが、北原白秋の薔薇という短い短い詩なんです。「薔薇二曲」つまり薔薇で四行くらい書いた中のその一つなんです。

薔薇ノ木ニ

薔薇ノ花サク。

ナニゴトノ不思議ナケレド。

というんですよ。

好きなものを一つ見つけたら、そういう風に出会った好きな詩がその人自身の作品だと思っています。それを好きになった人自身の。

ですから好きになった詩と出会ったとたんにあなたは詩人です。

なんだか知らないけどこれ気に入っているのよね、というのがあって誰が書いたのかしらと思って見て“くどうなおこ”と書いてあったら安心して吹聴しまくってください。

「この詩いいでしょ。これ私が書いたの。ちょっと仕事で忙しいから工藤直子に言いつけて書かせたの。これ私の作品。」だってその通りでしょ。私はそう思っています。

たとえば短い短い詩があります『のはらうた』の中に。あるとき小学五年生くらいのお兄ちゃんが、僕は「きりかぶさくぞう」の「くらし」っていう詩が好きですという、長い長い手紙をくれました。「くらし」というのはどういう詩かという、たった四行。

わしは／いちにちじゅう／

「どっこいしょ」を／している

というんですよ。まあね、自分が切株の気分になるとあぐらかいてね、なんかこうよっこらしよとすわっている感じがするもんですから、これ書きました。小学生ぐらいで「きりかぶさくぞう」が好きだよ、しかも手紙で3枚ぐらいなぜ好きか、っていうのを書いてくれたの。いやあうれしいですね。そうなったらそのお兄ちゃん作品ですよ。

そういう風に好きだよっていつてくれるベストファイブに入るのが「ねがいごと」という詩です。

「ねがいごと」というタイトルで誰が書いたのかというと「たんぼぼはるか」なんですよ。これも簡単だから朗読してみるね。

あいたくて／あいたくて

あいたくて／あいたくて

・・・

きょうも／わたげを／とばします

というんですよ。

これ「あいたくて」が4つです。私の詩の中ではその後、シーンとだまっているたんぼぼはるかちゃんがいるんでしょうね。

1行あけて・・・と点が3つくらいあってまた1行あけて「きょうもわたげをとばします。」ここでためてるんですね。あいたくて、あいたくて、あいたくて、ためてためてためて。

これにはエピソードがあります。ある小学校の校長先生が工藤直子の『のはらうた』が大変好きになったものですから、地区の研究会で話をしてもらおう、と招いてくださったんです。

それで私は、リュック背負って一人で会場に行きました。会場の小学校の前で、人待ち顔で立っておられるから、きっとその方がお手紙をくださった校長先生だなと思ったので、トコトコ行って挨拶して、「工藤直子です。」って言ったら「へっ！」といて飛び退かれたですね。それで「すみませんでした。」とお

っしやったんです。第一声が。後で聞いてみたら、ポリポリ頭をかいて「いやあ、先ほどは失礼しました。ぼくのはらうたの詩の中で、あいたくて という「ねがいごと」の詩が一番好きなんですよ。これこそは初恋の思いをすごく表しているな、こういう詩を書かれる方は20代の初めだろう、と思ったんです。」とおっしやったんです。

当時、私は60代だったんですがね。頭の中に思い描いているものとのその落差、それは仕方がございませんが。ですから校長先生にとっては、ご自分の何ともいえない初恋の思い出、切なくてきれいな思いというのが人生の中に埋め込まれているわけで、その詩を読んだときに、“どおん”とそれが出会って開いたわけでしょう。だからどう考えてもそれは彼の作品なんです。

20年くらいも前に、図書館の集まりの時でしたが、話が終わって感想をお聞きした時に、奥さんが手をあげてくださって、「あの、私一番好きなのは「ねがいごと」です。わたくし朗読しますね。」とってくださいったんですね。そしたら彼女が「ねがいごと たんぼぼはるか」って言って、1回目の「あいたくて」と言ったとたんにどっと泣き出されたんですよ。全員シーンとして、たぶん泣き出したご本人も「わあ、どうしちゃったんだろう」という気持ちになっていただろうと思います。わたしはそのときに「どうしたの」なんてことは聞けなかったけど、思い当たるという気がしました。きっと最近とても大切な人と、とても悲しい別れをされたんじゃないか、たぶん亡くされたんじゃないか。という気がするんですね。

実は、私自身26歳の時に突然うちの大好きな父ちゃんがふっと亡くなったんですね。私は東京にいて、父ちゃんは九州の大分だったんですけれども。本人は大往生というかね、その日の朝まで釣りに行って、お昼に帰ってきて「かあさん、今日はちょっと疲れたな。

寝るぞ。」って言って、お布団敷いてもらって寝間着に着替えて、お茶一杯もらって「すまんなあ」といって寝て、それっきりなんですよね。だから近所のじいちゃんばあちゃんは、うちの父ちゃんはゆたかって言う名前なんですけれども、「ゆたかはんはええなあ」と羨ましがっていました。春の真っ盛りでしたから、西行法師みたいなもんですよ。

ところが残された父ちゃんファンの直子としてはどうしていいかわからないわけですね。なにか杖がほしいんです。そのとき私が支えにしたのは、ことばだったんですね。

翌日のご飯も作んなきゃいけないし、宿題だってあるし、仕事があるし、玄関出りやとなりの奥さんに「おはようございます。」って挨拶しなきゃというときの日常を支える杖がほしくて。それはことばだったんですね。

大江健三郎さんが若い頃に書かれた『日常生活の冒険』という、私の大好きな小説があります。その中の主人公が惹かれて、自分のぼろアパートに書き留めておいたものを置いてあるという設定でゴッホの詩というものが出てくるんですよ。とても短いです。

死者を死せりと思うなかれ

生者(しょうじゃ)のあらん限り

死者は生きん 死者は生きん

私さえ記憶していれば、私が生きている限り死んだ父ちゃんは生きているよ、と私は読み取りましてね、いつでもおまじないのようにつぶやいていたんですね。

で、そのわっと泣き出されたお若い奥さんは、なんかその杖の一本として「あいたくて」という詩を持っていらしたんじゃないかな。ご本人も気がつかず。でも、朗読しようと思ったときにどっと出てきちゃったのかなと思います。

だからこれ全然違うでしょ。初恋と思った人にとってはその人の作品だし、これはもはやもう会えない人への杖だと思った人にはそういう詩なんです。そしたらさあ、もし「だ

れが書いたんですか」と言ったとき「はい、わたしです」なんて言えないですよ。

私は私でこの「あいたくて」に思いを託して書いたんですよ。でもそれはいいんです。こういうものってね、読んでくれる人がいなきゃただの紙の束です。図書館で大変ですね、紙の束ばかりで。でも何でか知らんけどご縁があって、手に取っちゃった。よくあるでしょ、こうしてばらばらと開けてみる。そのときにご縁ですよ。たまたま開いたページで「あらら！」ってなったりして、そしてそのときに初めてこれが紙の束でなくなる、読んでくれる人が来たから。そのときにたぶん読む人は、お目々で一粒一粒文字を食べるように自分の中に文字を入れてるはずですよ。それはまるでおいしい食事のように。ゴクンって飲んで内側に入っていったときに、自分の中の寂しさとか、つらさとか楽しさとか輝きとか、自分でさえ探し出せない見えなかったものが、つんつんと押されるんですね。

例えばカーテンのひもみたいにパンパンで引っ張られると、ペアってそこが出てくるから思わず泣く、思わず笑うってのが出てくる。だからもう正真正銘、その瞬間その詩はその人が作ったんですよ。ね、納得でしょ。

私、昔、宮崎大学というところで、2年半くらい、大学の1・2年生に毎週レクチャーしてたんです。そのときに『のはらうた』を「今週のお土産」って言って全員に配って、そこにはアンケートみたいな落書きコーナーがあって、「話を聞きながら出てきたものは何でもいいからそこに好きに書いてちょうだい。」というのをやってたんです。

その中に、「今週のお土産」の詩を全部パロディーにして返してくる子がいたんです。ある週の詩が「ねがいごと」でした。さあこのお兄ちゃんはどんな風にパロディーにしたでしょう。

「あいたくて」が4回あります。その全部の「あ」と「い」の間に点を打ちました。

あ、いたくて／あ、いたくて
あ、いたくて／あ、いたくて
・・・

きょうも／はなげを／とばします
ねえ。これは傑作ですよ。

そんな風の一つの詩がいろんな風に出会えるというのをみんなも感じてもらえると嬉しいし、密かに好きな詩ができたなら「これは私の作品よ」って。

人にいいふらすのは工藤直子のだけにしておいて下さいね。

私だって密かに「これはまどみちおさんにお書かせ申し上げた私の作品がここにある」みたいな感じになっています。

「するめ」っていう詩があるんです。

とうとう
やじるしに になって
まいている
うみは
あちらですかと・・・

*「せんねんまんねん」(童話屋 1990 年刊) 所収
というのよ。

図鑑や映像で長年見続けていたイカくんの一生の情景が多分どっかにぎょーんと、ぎゅーんと自分の中にあふれた。それが、それに結集したんだと思う。だからそのとたんにもう自分がイカ自身になっている訳です。

それと一緒に自分の人生もイカの人生も命も同じ目線でみえるみたいな気になる。ちょっと滑稽でちょっと切なくて、でも「まっいか」みたいな人生観もスルメと私とほとんど変わらなくなっているんです。その感覚が好きなんです。

こうなったらもうねえ、まど・みちお様がどんなお気持ちでお書きになったかなんていうのは、実はこっそり放ってあるんですね。それでもうこれはまどさんにお書かせ申し上げた私の詩だわって思い込んでいる訳です。

あるんですよ私たくさん。そういうのが。松尾芭蕉に書かせた私の俳句がこんなところ

にあるみたいなのがあります。

行春や鳥啼魚の目は泪

っていうんです。

それに関しては絶対に解説は読まないです。こっそり私のものだと思っているから。

あとはどんな風に朗読したらその作者としてはOKですかっていう質問もよく聞きます。

まず、詩を好きになってほしい。それも肩書きなしで。もう自分の魂の部分で。

そしたら読み方に関しては自分の読み方こそがその詩を大好きに読める方法です。

それで、もしも誰かに聞いてもらおうとしたら、それは聞かせてあげるではなくて「ねえねえねえお願い、聞いてくれると嬉しいなあ」みたいな感じで、小さい人に向かってもやってくださいと嬉しいですね。

かまきりりゅうじの「おれはかまきり」というのでやってみますね。みなさんがご存じないという設定です。

「あのねえ かまきりりゅうじなんていう名前のかまきりがいてねえ うた書いたんだよ、歌ったんだよねえ。こんなうた聞いてみて」っていう感じです。あんまり思い入れも入らないでまずは渡したいでしょ。その時の読み方っていうのは、なるべくくつきりはっきり明瞭にその意味が載せられる発音、音の出し方、例えば百人もいてマイクも持ってなかったらちっちゃい声だと遠くの人に聞こえないし。

それから、詩は点や丸が無い場合が多いですけれども、一行があって次に行が変わってまた一行ありますが、それは長い短いがありますよね。それによくよく気を付けて見るとですね。ここ一字分空いているというところがあります。やっぱり書いた人の呼吸が微妙に長いんでしょうね。で一っと読むんじゃなくてそこでちょっと空けて欲しい。今度は行が変わるっていうのは、もうちょっと間が欲しい。さっきも言ったように、「・・・」なんかがあったらそこは「んー」って考えている感じが、何にも書いてないよりもするなあ、と

いう風に文字の姿に合わせて聞こえるように読む。で、私としては活字読みという風に仮に言っています。だからその読み方で読んでみるね、まず。どんなうたか聞いてください。

「おれはかまきり」 かまきりりゅうじ
おう なつだぜ
おれは げんきだぜ
あまり ちかよるな
おれの こころも かまも
どきどきするほど
ひかっているぜ

おう あついで
おれは がんばるぜ
もえる ひをあびて
かまを ふりかざす すがた
わくわくするほど
きまってるぜ

これね、私、朝日新聞のオーサービジットで、小学校や中学校のみんなの所に行って、授業もどきをやってます。

小学校の1年生が、ピッカピッカのりゅうじくんみたいに朗読した場合と、セブンティーンの「まあな」という感じの朗読じゃ違うので、小学校のみんなの前で、「これからやるからね」といってやるんですよ。小学1年バージョンとセブンティーンバージョンをやります。全部同じだったら笑ってやってください。だいたい立ち方からして違います。小学1年生だったら緊張して、ちょっとうれしくて、ちょっとにこにこして、けっこう気をつけ、みたいにしています。行くよ。

(略)

じゃ、つぎはセブンティーン、問題児セブンティーン。立つときだって気をつけなんかするもんか。片足立ちですよ。こうやって。

(略)

これは文面どおりです。でも先ほども申し上げたように詩はもう好きになったらこっちのものです。特に直子のは。

論文のように説明することとは別の機能も言葉にはあるんですよ。それは感性、感覚の部分。それに音の響とか、言葉をおもしろがる素材として、わたしの詩は、遊んでいただけるとうれいな、と思います。

(「かまきりりゅうじ」を
「68歳のじいちゃんかまきり」
「関西出身のお兄ちゃんかまきり」
のバージョンで次々に朗読。)



CDの曲を作りまして、楽譜も作ってもらえたんです。新沢としひこ君が曲にしてくれて、彼が歌ってくれた曲です。聞いて下さい。(CD曲を流す)

これいいでしょ。なんかね、すきなんですよ。

こういうふうには『のはらうた』というのは、ぼつつらぼつつら作りまして、全5冊になりました。あと20周年記念の時に、『のはらうたわっはっは』というのを作りまして。

それで、来年の春ですが、『えいごのはらうた』っていう、英語の対訳のものが出ます。

ネイティブの人が読んでもおもしろくて「ぷっ」と笑ってしまうってやつで、60編です。楽しみにしててください。

最後に、そうやって5冊も20数年間作っていると、私の中でのほら村ができあがってきます。それでね、ここで新しく生まれてきたのに「あおぞらよしあきくん」というのがあります。そして「あおぞらよしあきくん」の詩を作っていたら、「あら、あおぞらよしあき

くんの恋人ってにじひめこちゃんだわ」と思ったんです。それでね、このCDの一番最後があおぞらよしあきとにじひめこで終わります。それを聞いてください。

「あおぞらよしあきくん」とその恋人の「にじひめこちゃん」を朗読します。そのあと音楽、新沢君どんな曲つけたんだろうな。私ならこうするなと思いつつその曲を聞いてください。

「なみだのちにじ」 あおぞらよしあき
いつも なみだはみせないぼくです
はればれと あおいむねをはって
おおぞらを ささえています
でも ときどき
とても さびしくなる
どんなに さびしいかという
でかすぎて
はかれないくらいです
そんなとき ポケットから
あまぐものハンカチを とりだして
いっぱい なきます
しくしく…しとしと…ざあざあざあ！
そのあとは すっきりからり
おおぞらに にじをかけて
あっはっはと わらいます
すると みんな
そらを見あげて ほっとします

「えいえん」 にじひめこ
あめあがり あおぞらが
あんまり すてきだったので
おひさまと そうだんして
にじいろの みちをかけました
あおぞらが えいえんに
かがやきわたるようにとの
ねがいをこめて
ごらんなさい
いま にじのみちを しずしずと
「えいえん」が わたっていきます
すぐきえる わたしですが

あおぞらと いっしょに わたしも
えいえんに「あらわれつづける」
つもりです

というものです。

みなさんに、虹が贈られて良かったです。

最後に、これを気に入ってくださればあなたの詩にしてくださいという、私が唯一暗記できる詩をご案内します。

生まれてきたのはどんなご用があったのかな、というのが私がいまだに思っているテーマです。わからないのが生きてることかな、とも思っています。という感じで「あいたくて」という詩を書いています。それをみなさんに捧げます。気に入ったら直子に書かせた自分の作品にしてください。

「あいたくて」

だれかに あいたくて
なにかに あいたくて
生まれてきた—
そんな気がするのだけれど
それが だれなのか なになのか
あえるのは いつなのか—
おつかいの とちゅうで
迷ってしまった子どもみたい
とほうに くらいている
それでも 手のなかに
みえないことづけを
にぎりしめているような気がするから
それを手わたさなくちゃ
だから
あいたくて

今日はみんなにお会いできてうれしかったです。

(最後に、サプライズ。会場から、斎藤惇夫さんが登壇。)

地元の誇る人です。最近なんか新しい本を書いたそうじゃないですか。いつか今度彼をここに立たせてください。

どうもありがとうございました。